

梅の春

へ四方にめぐる 扇巴や文車の ゆるしの色も昨日今日 心ばかり
は春霞 へ引くも 恥かし爪じるし 雪の梅の門ほんのりと へ匂ふ
朝日は赤間なる 硯のうみの 青畳 もじがせき書かき初に 筆ぐ
さ生ふる浪間より 若布刈るてふ へ春景色 浮いて鴟の一ィニウ三
ィ四う へいつか東へ筑波根の かのもこのもを都鳥 いざ言問はん
恵方さへ へよろづ吉原山谷掘 宝船こぐ 初買に よい初夢を三
ツ布団 弁天さんと添ひぶしの へ花の錦のかざり夜具 はたちばか
りも積み重ね へ蓬来山と祝ふなる 富士を背中に家がための 塩
尻ながく居すわれば ほんに田舎も真柴焚く へ橋場今戸の朝煙
り つづくかまども賑はふて へ太々神楽 門礼者 梅が笠木も三
囲りの土手に さへずる鳥追ひは三筋霞の連れびきや へ君に逢ふ
夜は たれ白髭の森越えて 待乳の山と庵崎の その鐘が洩かねごと
も 楽しい仲ぢゃないかいな 面白や 千秋楽は民をなで 万歳楽
には命を延ぶ 首尾の松が枝竹町の 渡し守る身も時を得て 目出
度くこゝに隅田川 つきせぬ流れ清元と 栄え寿く梅が風 幾代の
春や匂ふらん幾代の春や匂ふらん。